

文語日誌(平成二十六年五月二十六日)

水道橋界隈の古書肆「日本書房」にて、「明治百家文選」(隆文館刊、明治四十年再版)を五百圓にて購ふ。該書の古書相場は六千圓程度なれば掘り出し物といふべし。

編者は文學士の久保天髓氏なり。天髓、明治八年の生れにて、東京帝國大學漢文科を卒業後、多くの漢文關係の著作あり、後に臺北帝大教授も務む。昭和九年歿。

本書刊行の趣旨は、序にある如し。輒ち曰く、「文を學ぶ、必ず先づ標的を定めざるべからず。その法たるや、人名あるものゝ中、わが姓の最も近きを撰び、その得意の作數篇を取り、文法の在るところに就いて縷陳して分析し、しかる後、心を潛めて誦讀し、久うして已まざれば、文氣自然に我が胸臆の間に浸潤」せむ、と。

本書の構成、「現代名家の文百篇」、著者苗字のいろは順に並ぶ。目次を眺むれば、鏡花、蘇峰、蘆花、紅葉、樗牛、逍遙、獨歩、子規、藤村、一葉、鷗外等を含み、壯觀といふほか無し。冒頭の文は井上巽軒(哲次郎)の「色彩に附隨する觀念」なり。曰く、「色彩の性質、關係、結果等を研究することは、畫工の怠るべからざる所なるが如し、然るに世の畫工は此の如き研究をなさずして、唯々經驗によりて色彩を施すに過ぎず」と。その後、赤色は快活なる旨趣を有し黒色は陰鬱なる旨趣を有す等の議論の展開之有り。

第二の文は、池邊鐵崑崙の「奈破帝の臨終」なり。「五月三日、精神不覺となる。きれぎれなる言語の中に、吾が兒……軍隊……デゼックス……」とあり、續けて五月五日午後五時四十五分に帝の崩じたる様を描く。

以下、小生にとり印象に残りたるは、三宅雪嶺の「不生長の英雄」てふ文なり。歳四十にして臺灣にて空しく臺南の煙と爲りたる兄の追悼文なり。曰く、「少時漢學を修め、十三歳蘭學に入り、佛學に轉じ、翌年英學に轉じて、十七歳東京に出て、二十四歳東京大學法學部を卒業せしが、斯く修業するの際、幾分か諸藝に通達せり、未だ郷關を出でざりし時、詩歌擊劍一通り修め、大學を出づる頃は、點茶插花の法を解し、且つ吹笛に巧みなり、能く泳ぎ、能く相撲し、能く銃獵し、而して又好で書を讀み、ホームルの詩の如き、ポープ、ブライアントの譯を比較して精讀せし等、洵に詭ひ向のレファインド、ゼントルメンたりしなり。」とし、「嗚呼悲しい哉、於戲わが亡兄を悲むは、又世の成長せざる豪傑を悲むものぞかし。」と締め括る。雪嶺身内の追悼文は珍し。

雪嶺の妻、三宅花圃の文も選ばれたり。標題は「女の娛樂」。和歌、裁縫、刺繡、繪畫、讀書、手習、音樂はいづれも皆室内の遊びを旨とすれば、「心の晴れけむ筋無きぞ口惜しき」と述べ、婦人の數少なき戸外の遊びとして寫眞の術を推奨す。「家の人々うちつれて近郊の散歩にも、まづこれに夫子の姿うつし入れては、日記にそなへてのちの思ひ出にも爲しつべく、盛暑の候、一家擧りて、山水の邊り、轉地保養のほどは、朝夕の富獄を手箱の中に納め、漕ぎいづる舟の

あとなき大海原も、懐紙の間にさしはさみて、いく久しく折々とり出でむ樂しみは、われ一人にはかぎらざるものならむかし」とあり、花圃の文體、さすがに美し。

内村鑑三の文は「愛國的妄想」なり。曰く、「日本教と稱して異常の倫理學的系統は編み出され、萬國歴史の攻究は疎んぜられ、紫式部の源氏物語は愛國的讀本として採用せられ、バーク、ゴールドスミスのは或は博愛主義を教ふるの故を以て、教科書としては使用を禁ぜらる。科學にワット、ニュートンの跡を逐ふも、倫理に鎌足、正成を仰ぎ、西洋を學ぶに常に實利的觀念を以てし、彼の技藝を受けて其精神を卻く」と。結論部分には、「余輩は世界の標準に照して日本を攻究するの必要を感じるものなり」とあり、編者この文を採擇するの氣持ちを思ひ、明治百家の思想傾向の多岐に互ることを許容する懷の深さを改めて感ずる次第なり。

「明治百家文選」、紙數の關係に依り紹介し盡くすこと能はず。先人の感性を學ぶ縁ともなる本書は、「文語百撰」と並び座右の書の一となるらむ。